
蝶と吸血鬼

芹久 生露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝶と吸血鬼

【Nコード】

N3848Z

【作者名】

芹久 生露

【あらすじ】

少女ロロットは、満月の夜にヴァンパイアの少年、マルクと出会う。

素直で物怖じしないロロットと、かつこつけだがちょっと抜けるマルクの恋。

しかし、二人の恋は決して実ってはならないものだった。

更新は不定期になります。

1話 出会い（前書き）

はじめまして。

今までは読むだけでしたが、連載してみたいと思っていたので、執筆してみました。

拙い文章ですが、よろしくお願いします。

1話 出会い

彼は静まり返った満月の夜、背中から生えた二つの翼でドルクの町を散歩していた。

夜の町には、心地よいひんやりした空気が漂っていた。

夜の散歩は彼の日課の一つだ。祭りなど特別な事がない日は夜闇に紛れて短い外出をするのだった。

彼は自慢の輝く銀髪をなびかせながら町を見下ろしていた。

ふと町を見下ろすと、赤い屋根が並ぶ中、白いベランダにさらに白い服を着た金髪の少女がたたずんでいた。

大抵の住人は眠りにつくこの時間に。

彼は少しおどかせてやろうかと、高度を下げて夜闇に溶け込む。

ふと彼女の顔を見ると、そばかすだらけの頬が一筋光って見えた。

彼女は泣いていたのである。その瞬間、彼は今まで感じたこともない不思議な感覚にみまわれた。

それは頭が熱くなるような、ちょうど喉の奥から何かこみ上げてくるような、心臓が鼓動を刻み、彼の身体には無いはずの熱い血液が身体中を駆け巡ったような感覚だった。

彼は少し考えてから、するりと猫のようにベランダの下に着地するとズボンのポケットから何か取り出した。

「おーい！」

彼女が気付くとパチンと指を一回鳴らす。
すると、彼の手からいくつもの色とりどりの風船がふわふわ飛んでいった。

彼もひとつの風船に掴まりベランダに降り立つ。
もう一度指を鳴らすと、風船がわれてキラキラ光輝く粒がベランダにゆっくり落ちてきた。

これは彼渾身の、魔法を使った曲芸の一つだ。
実は昼間用だったが……

「すっごーい！ あなた、魔法が使えるのね。その赤い目は……もしかしてヴァンパイア？」

彼女は空のように青い目をキラキラさせて聞いた。

「その通り。ヴァンパイアだよ。僕はマルク。君はなんていうの？」
「私はロロット。ロロット・バリエ。ヴァンパイアなんて初めてみたわ」

そう言ってロロットは微笑む。

「ここに座って少し待っててね」

マルクが椅子に座るとロロットはかけあしで家に入っていった。しばらくすると、白いティーセットを持ったロロットが歩いてきた。彼女はテーブルにティーセットを置くと、カップに紅茶を注いだ。

「お待たせしましたっ」

「わざわざありがとう。君はこんな夜中にどうしたの？」

マルクはカップをとり、一口含む。

アールグレイの葡萄のような香りが鼻を通る。

「別に。少し考え事をしてただけよ」

「夜中に外に出たら危ないじゃないか。僕みたいなヴァンパイアが君みたいなきれいな女の子をたべにきたやうよ」

マルクは犬のように鋭く尖った牙を見せて笑った。ロロットも大袈裟に怖がったふりをした。

「うふふ、まあ怖い。でも大丈夫！ ほら、これがあるもの」

物怖じしない少女は首にかかっている十字架をかたどったペンダントを宙にかかげる。

「うげっ！ それは勘弁してよ」

二人は、一晩中他愛もない話をして夜をあかした。

しかし、ヴァンパイアと人間の恋は決して実ってはならないものだった。

2話 翌日

マルクは、家に帰ってからもずっと頭をひねっていた。

彼には、なぜロロットと話してみたくなったのか、あんなに胸が熱くなっただのか、皆目見当がつかなかった。

屋敷にある医学の本を片っ端から読んでみたが、該当する症状は見つからない。

これは、人間の小説に取り上げられる「恋」とか「愛」に酷似していると思ったが、ヴァンパイアは魔力を持ったコウモリの集合体なので恋愛感情はないとされている。

しかし、恋をしたヴァンパイアは早死にするという言い伝えがあるのも事実。

きっとこれは恋なのだろうと彼は確信した。

「これが恋というもののなかッ！」

意味もなく叫んだマルクは、昼通し読んだ本の山を部屋の脇に押しやり、窓から外を見る。

ロロットの瞳のような青い空が広がっている。

彼女は今頃学校で授業を受けているだろうと思った。

あの、満月の下の夢のようなひと時が頭から離れない。

ふと、窓に映った自分が気になり、洗面台の曇った鏡で姿を確かめる。

薄いシャツ一枚とボロボロのジーンズの銀髪で青白い少年が映った。

「たまにはスーツでも着ようかな……。クローゼットにあったし。そうだ！薔薇をくわえるとか」

急いで花屋を探しに走っていく。

明らかに変な方向に走り始めたマルクだった。

栗毛の少女は、机に頬杖をついたまま、睡魔と格闘を繰り広げていた。

「大丈夫？ ロロット？ よだれ垂れてるわよ」

隣金髪の少女から声がかかる。

栗毛の少女——ロロットは昨日の夜、ヴァンパイアのマルクと夜通し会話をしたので寝不足だった。

授業中も目を開いているのがやっとだった。

休み時間にその眠気がどっと押し寄せてきたようだ。

しかし、彼女の休息も束の間、先生がツカツカと歩いてくる。

「バリエさん？ 授業始めるわよ！」

「ひゃっ！」 おでこを小突かれて目を開く。

クラスでささやきや、くすくすと笑い声がしている。

「すみません」 ロロットは赤面した。

夕方、ロロットと友人のクラリッサは石畳の上を歩いていた。

ドルクの街中は、行商人の呼びかけや三、四十ぐらいの中年女性の世間話で賑やかだった。

「ねえ、ロロツト。昨日の夜中何してたの？」

クラリツサの視線が突き刺さる。

「べ、別に。考え事してだけよ」

ロロツトは反論する。

「……怪しいわね。何か隠し事してるでしょ」
とクラリツサ。

「別に隠し事なんてしてません」
マルクの顔が頭に浮かぶ。

「もしかして……何か人に話せないような事とか？ キャー！！」
ロロツトってお早いのね」クラリツサは黄色い声を上げ、ロロツトをからかう。

「もう！ 何もしてないって言ってるじゃない」ふと空を見上げると、空には真つ赤な太陽と、美しい橙の夕焼けが見える。
振り返ると、空の端から藍色の夜が這い寄ってきていた。

あの藍色の夜が月と共に彼を引き連れてやってくる気がした。

「月っ！ 月を見ていたの！」

ロロツトは思いついたように言い放った。

「はい、嘘。バレバレ。ますます怪しいわね」

「そんな……」

クラリツサという言葉の城塞には傷一つついていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3848z/>

蝶と吸血鬼

2011年12月13日00時57分発行